県営干拓地等農地整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告

―― 近江八幡市塚町遺跡 ――

1984

滋賀県教育委員会
財団法人滋賀県文化財保護協会

序

昭和57年度現在で県下のほ場整備事業は、計画面積の約半数を実施した状況にあり、58年度は、その折り返し時期と言える。この意味においては、今後ますます、ほ場整備事業の促進に拍車がかかり、合せて、当事業にかかわる発掘調査も更に増加の傾向にあります。

今回の調査も、このような状況の中にあって、今年度実施した発掘調査の一つであり、事業が円滑に遂行できたことは、関係機関の御理解の賜ものと感謝しています。また間断なき発掘という時間的制約の中で当報告書が刊行できたことについても喜こんでいる次第です。

最後にこの報告書が、滋賀県の埋蔵文化財に関する理解を深めていただく一助になれば幸いであります。

昭和59年３月

滋賀県教育委員会事務局
文化部文化財保護課長
外　池　忠　雄

例　　言

1．　本書は、滋賀県の実施する県営干拓地等農地整備事業に係る近江八幡市塚町遺跡の発掘調査の報告である。

2．　本調査は、滋賀県農林部の依頼により、滋賀県教育委員会の指導のもとに財団法人滋賀県文化財保護協会が実施したものである。

3．　調査および整理・報告は、滋賀県教育委員会の指導のもとに、財団法人滋賀県文化財保護協会技師宮崎幹也が担当した。調査組織は次のとおりである。

調 査 指 導　近藤　滋（滋賀県教育委員会文化財保護課主査）

主任調査員　宮崎幹也（財団法人滋賀県文化財保護協会調査課技師）

調　査　員　和田光生（大谷大学ＯＢ）

調査補助員　深井　圭（駒沢大学ＯＢ）、広瀬幸男（大谷大学）、亀塚　修（龍谷大学）

事　務　局　江波弥太郎（財団法人滋賀県文化財保護協会事務局長）

松本　暢弘（　　〃　　総務課主事）

4．　調査実施にあたっては、地元多賀町の協力を得た他、出土遺物の写真撮影については寿福滋氏の協力を得た、記してお礼申しあげたい。

目　　次

序
例言
第１章　はじめに …… 1
第２章　位置と環境 …… 1
第３章　調査の方法と経過 …… 3
第４章　調査の概要 …… 3
第５章　まとめ …… 8

図　版　目　次

図版１（上）　調査区全景（東より、後方は八幡山）
（下）　調査風景（南東より）
図版２（上）　第２トレンチ（南西より）
（下）　第１トレンチ（北西より）
図版３（上）　出土遺物（土器・瓦）
（下）　出土遺物（木器）

挿　図　目　次

第１図　調査地位置図 …… 2
第２図　トレンチ配置図 …… 4
第３図　トレンチ断面土層柱状図 …… 5
第４図　第１トレンチ遺構図 …… 6
第５図　出土遺物実測図 …… 7

第１章　はじめに

本報告は近江八幡市多賀町において実施した県営干拓地等農地整備事業に伴う埋蔵文化財事前調査の成果である。

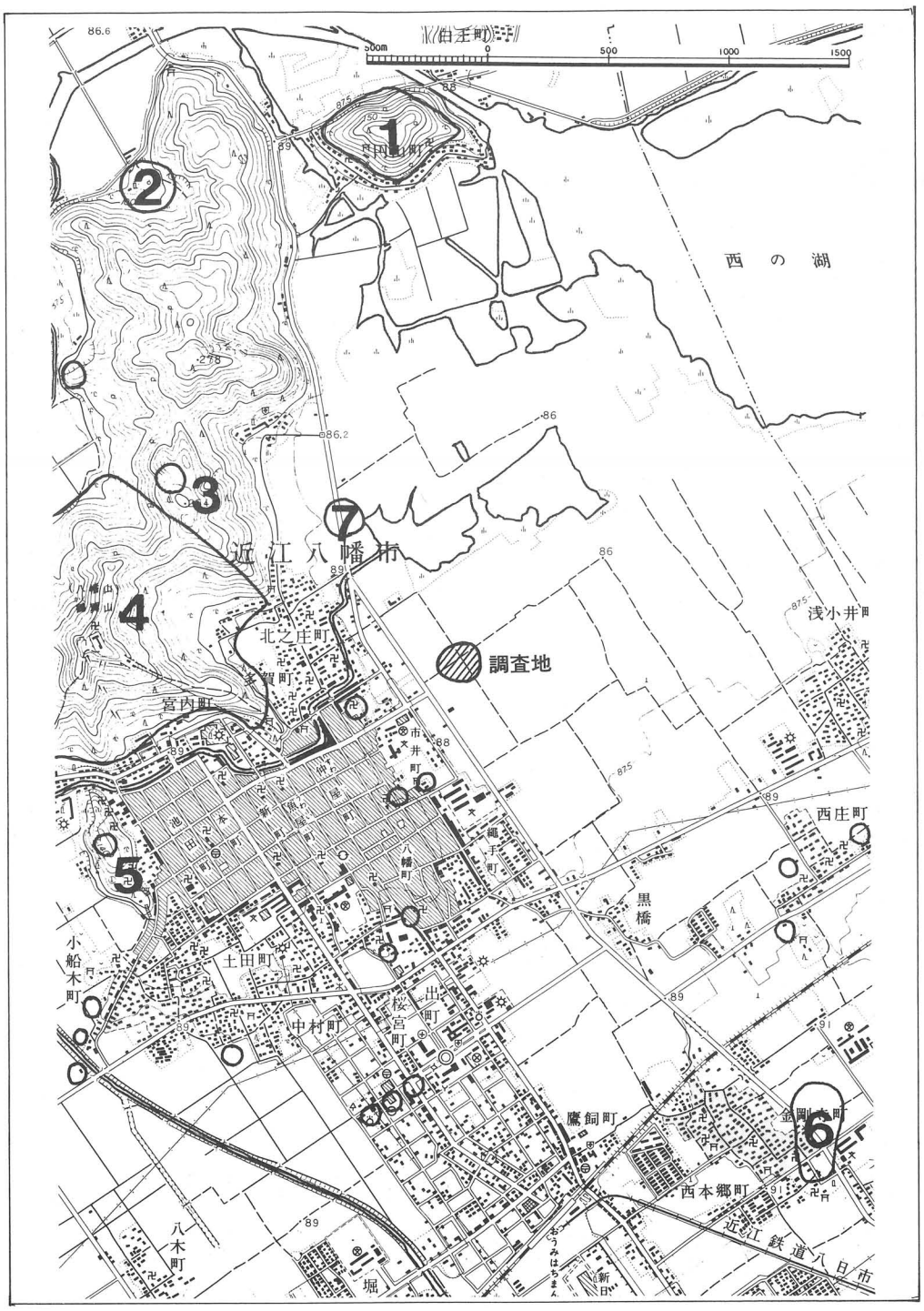
塚町遺跡は『滋賀県遺跡目録』に近江八幡市の第33番の遺跡として記載されており、旧内湖が干拓される際に弥生式土器の散布が認められ、石斧の出土をみているが、遺跡の実態は明らかでなく、その性格と規模を把握するため発掘調査を実施した。

第２章　位置と環境

調査地は、内湖の干拓によって旧状を変えており、現在では標高85～86ｍの水田が北方の安土町方面へと広がっている。耕土下には、旧状が湿地であった箇所と、わずかな微高地様の箇所があり、後者では、地山の淡黄褐色粘土層が八幡瓦製作の粘土として使用されており、周囲に採掘抗が点在する。

周辺の遺跡は、大半が西隣の八幡山（鶴翼山）の丘陵部ないしそれを取り巻く低丘陵上の安定した箇所に存在する。北部では円山古墳群（第１図―１）、北津田向山遺跡（同２）、西部では北之庄城遺跡（同３）、八幡山城遺跡（同４）、成就寺遺跡（同５）が丘陵上に立地し、南方の金剛寺城遺跡（同６）とも標高差が６ｍ以上あり、塚町遺跡の標高85.6～86.0ｍが遺跡の立地として不適当に思われるが、今年度調査が実施された近江八幡市内の長命寺湖底遺跡では、縄文時代晩期の琵琶湖の汀線を標高81.70ｍ前後に確認し、弥生時代中期初頭（第Ⅱ様式併行期）頃までの水位低下が明らかにされており、安土町大中の湖南遺跡や近江八幡市白王遺跡と同様に、低水位期の遺跡が存在すると推測される。

また、西北約800ｍの距離にある豊年橋遺跡（同７）は、塚町遺跡とほぼ同じ標高に立地しており、弥生式土器・土師器の散布が認められ、旧内湖周囲の遺跡として知られる。


500m
0
500
1000
1500
1
2
3
4
5
6
7
西の湖
近江八幡市
調査地
北之庄町
多賀町
宮内町
市井町
八幡町
縄手町
池田町
土田町
小船木町
中村町
桜宮町
出町
鷹飼町
黒橋
西本郷町
金剛寺町
西庄町
浅小井町
八木町
堀
新日
近江鉄道八日市

第1図　調査地位置図

第３章　調査の方法と経過

今回の調査は、ほ場整備の排水路部分と河川改修部分について行うこととし、任意に試掘坑を設定し、バックホウにより表土（耕作土等）を除去した後、遺構・遺物の検出に努め、その結果に基づき、必要と認められたところについて随時試掘坑を拡張した。

現地調査は、７月８日より７月26日までの延19日間にわたって実施し、調査終了後に整理作業をおこなった。

排水跡部分の調査は、第１トレンチ～第４トレンチ、第11トレンチ～第14トレンチ、第15トレンチ～第16トレンチの３箇所に分けて実施し、遺構・遺物包含層の有無を確認した。

河水改修部分の調査は、掘削を受ける地表下約２ｍ40cmまでを対象とし、第５トレンチ～第10トレンチの計６ヶ所で、土層堆積を確認したが、地盤が非常に軟弱であったため、写真撮影と土層図作成後、即座に埋め戻した。

また、調査区は低湿地であるため、掘削した試掘坑（トレンチ）が即日で満水になり、ポンプ排水をしながらの土層観察や遺構検出の作業は困難を窮めた。

第４章　調査の概要

１．層位　調査地の南北約300ｍに及ぶ土層の変化は第３図に示すとおりである。北端の第１トレンチでは、耕作土22cmの下に18cmの暗灰褐色粘質土層が堆積し、直に遺構面である淡黄褐色粘土層へと続く。この暗灰褐色粘質土層は、調査区全域において確認され、耕作土直下か床土直下に位置する。この層位は遺物を包含しており、第２トレンチでは、須恵器・黒色土器・瓦質土器・瓦などが出土し、第７トレンチでは木器が、第10トレンチでは須恵器がそれぞれ出土した。第３図を見ると、この暗灰褐色粘質土層が北から南にむかって傾斜した堆積を示しており、南北のトレンチで地山と接していながら、中央部の第３トレンチ・第４トレンチでは地山との間に別の層位（灰

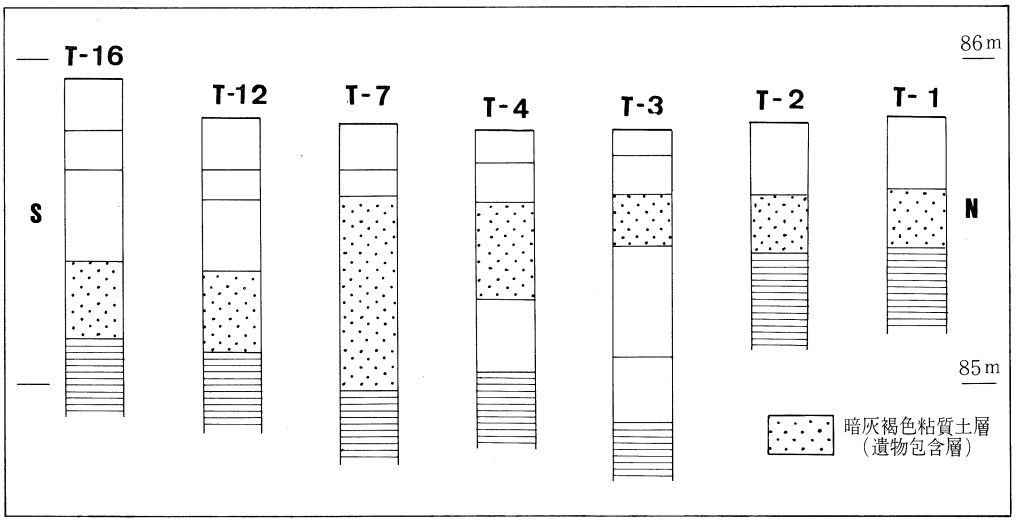
第２図　トレンチ配置図

白色粘質土層）を挟んで堆積している様子がわかり、第１トレンチで確認された遺構面よりも新しい時期の遺物包含層であることが認められる。

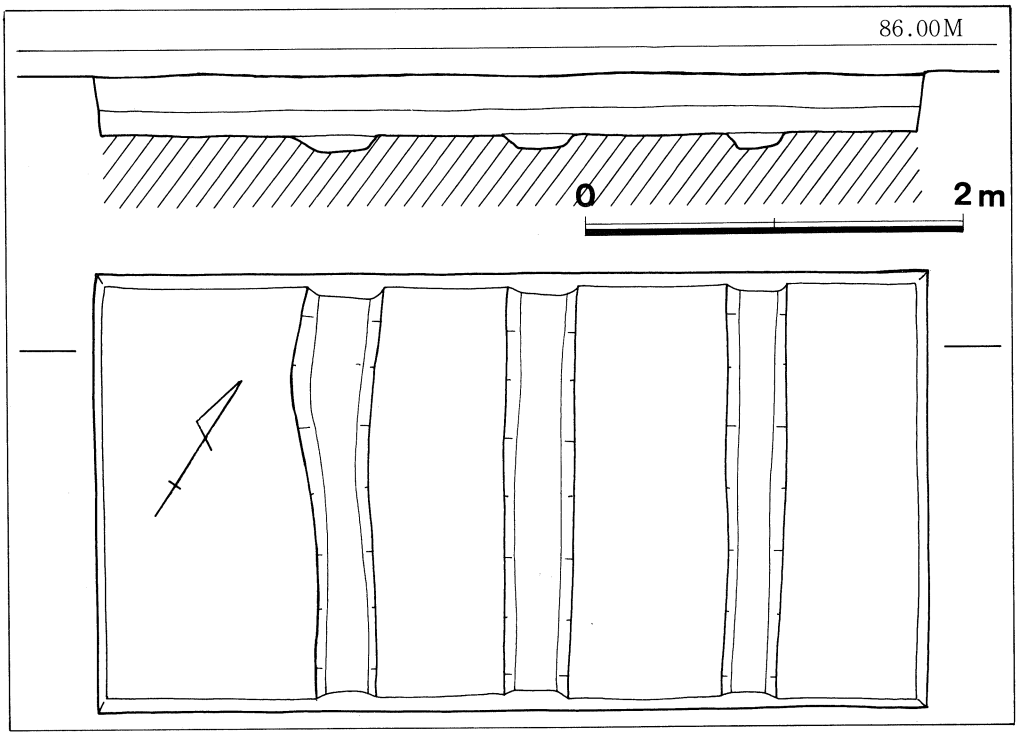
第５トレンチから第９トレンチまでの計５本のトレンチについては、河川改修時に地表下約２ｍ40cmまで掘削を受けるため、地山確認の意味で同レベルまで調査をおこなった。暗灰褐色粘質土層の下は、淡青灰色粘砂層・淡灰褐色粘土層・灰白色砂層・黒灰色砂層・淡青灰色粘土層と続き、遺物は確認されなかった。

２．遺構　今回の調査で確認された遺構は、第１トレンチの溝３本のみであった。この溝は、地山である淡黄褐色粘土層を切り込んで作られており、中の暗灰色土層中から古墳時代の須恵器破片が出土した。地山は北端部が最も安定しており、傾斜した南側の第２トレンチでは遺構が認められなくなる。第１トレンチで確認された溝は、幅30～40cm、深さ10cmを測り、約１ｍ60cmの間隔をもつ。溝の方位はＮ－32－Ｗを示し、現在の水田の基準方位とほぼ一致する。

溝以外の遺構は全く確認されなかったが、第２トレンチの中央部において、暗灰褐粘質土層の上部より瓦と黒色土器の２次堆積遺構を検出した。この一部では、年代不明の瓦片が礫石とともに堆積していた。



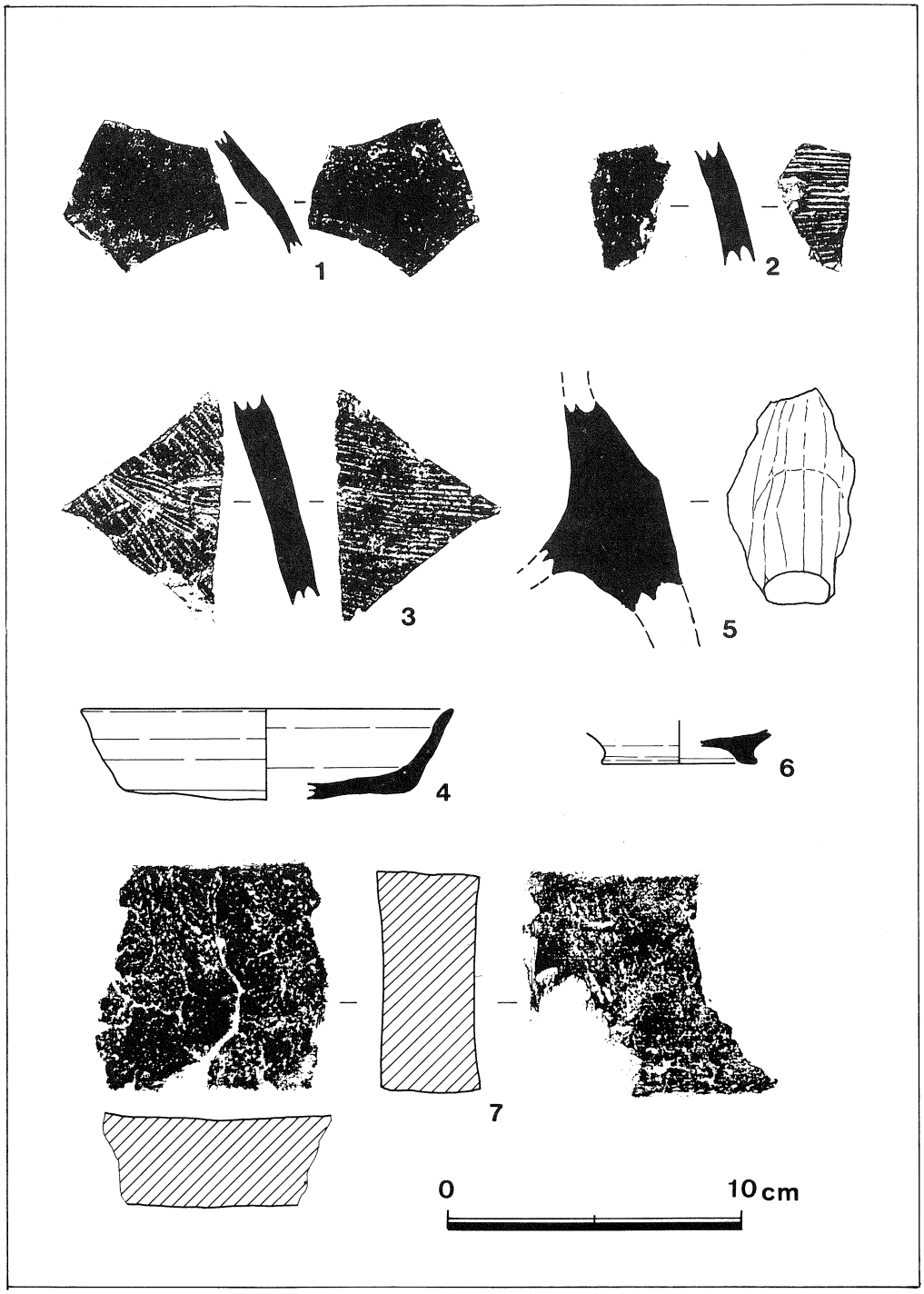
第３図　トレンチ断面土層柱状図



第4図　第1トレンチ遺構図

3．遺物　今回の調査で出土した遺物は、須恵器・黒色土器・瓦質土器・瓦類・木製品であり、その大部分は暗灰褐色粘質土層中から出土した。

（1）～（3）は須恵器の破片である。（1）は、第1トレンチの溝状遺構内から出土したものであり、（2）・（3）は甕の体部で、一部にカキ目を残すものである。（4）は高台を持たない須恵器の杯で、第10トレンチの暗灰褐色粘質土層中より出土した。口縁部下方から底部外方にかけての外面にヘラ削りの痕跡が認められ、8世紀後半から9世紀にかけての器形に類する。（5）は瓦質土器で、三足付羽釜の脚部である。土器の表面が非常に磨滅しており、残存状態が悪い。12世紀後半から13世紀前半にかけてのものであろう。（6）は黒色土器の高台部である。色調は黄褐色を呈しており、高台は下端部で外方へ肥厚する。（7）は瓦片であり、厚さ約3cmを測る。長さが7.5cmで両端に面を持つことから、のし瓦か塼に類したものが想定される。胎土は極めて精良で、硬質な焼成を受けている。この瓦は第2トレンチの暗灰褐色粘質土



第5図　出土遺物実測図

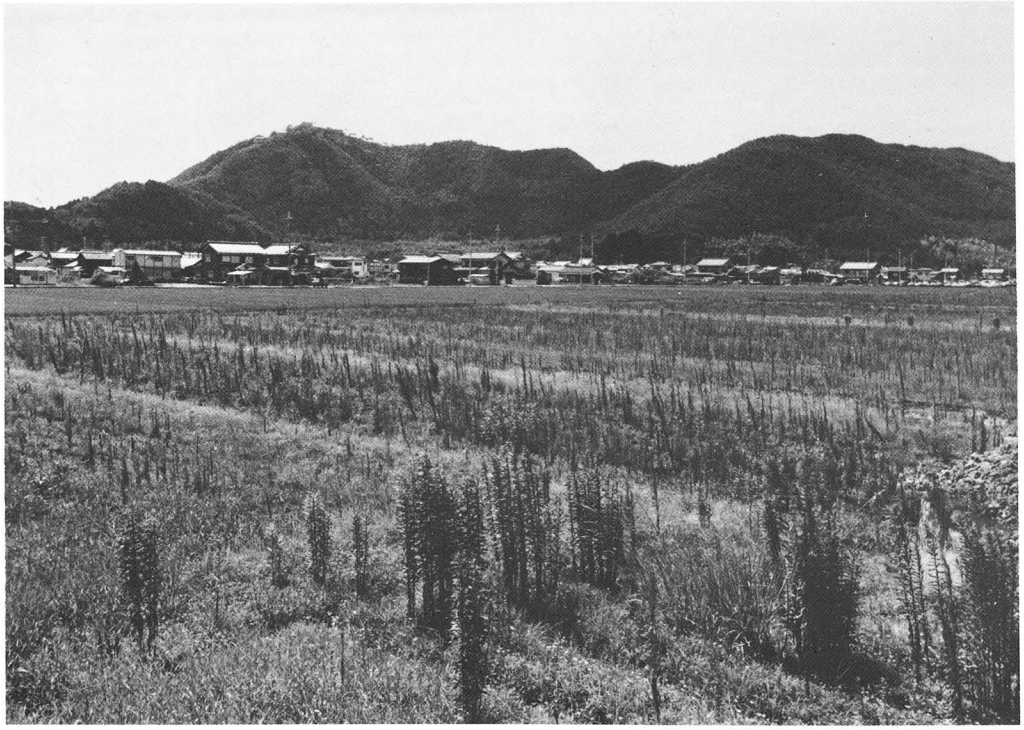
層上部における２次堆積遺構から、黒色土器（６）と伴に出土した。

この他に、木製品が２点出土しており、いずれも建材と思われる。（８）は、長さ24.0cm・幅7.5cm・厚さ3.5cmの板材で両端にほぞを持つ。（９）は、幅・厚みともに3.0cmの棒材で、約７cm間隔で1.0cm×2.0cmのほぞ穴を持ち、一部でほぞを残している。障子の枠に類した器形を示す。残部は長さ28.5cmを測る。時期は不明。

第５章　まとめ

今回の調査によって、当初想定されていた低湿地の弥生時代遺跡は何等確認されなかった。しかしながら、調査区の東北端にあたる第１トレンチでは、標高85.4mの遺構面上に水田の地割りとほぼ同一方位の小溝群を確認し、古墳時代の須恵器の出土をみた。調査区より東方は、安定した層位をもつようであり、遺跡の中心は、さらに東方にあると考えられる。調査区内では、地山と遺物包含層が北から南へむかって傾斜しており、旧内湖に続く低湿地の様相を示す。遺物包含層と考えられる暗灰褐色粘質土層は、古墳時代から中世期にかけての幅の広い時期の遺物を包含し、一部に２次堆積の様相を示している。これは、旧内湖の水位が、上昇・減退する過程で周辺の遺跡から流入したものと考えられ、今後の調査によって、内湖の周囲で繰り広げられた生活史が徐々に明らかにされることであろう。

図　　版

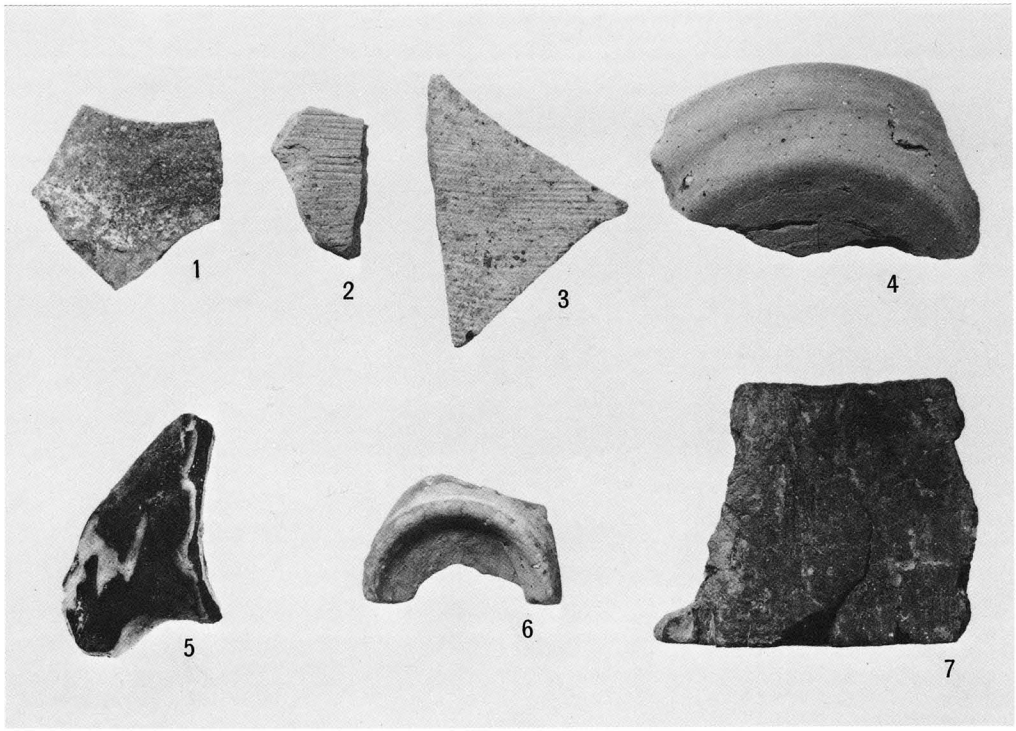


調査区全景（東より、後方は八幡山）

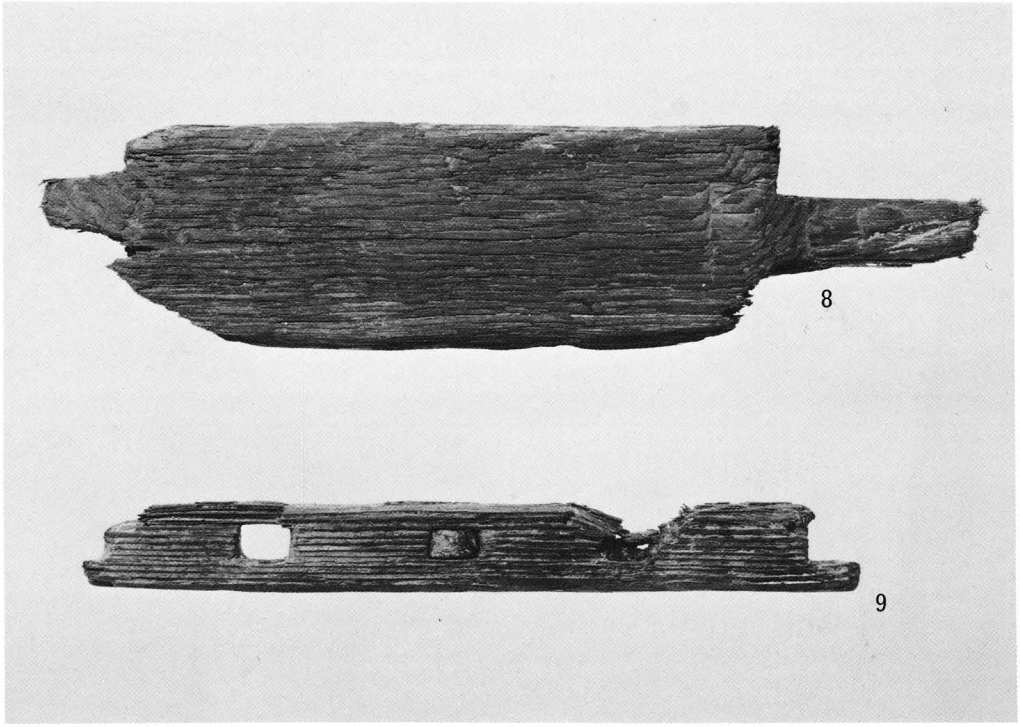
調査風景（南東より）

第2トレンチ（南西より）

第1トレンチ（北西より）



出土遺物（土器・瓦）



出土遺物（木器）

県営干拓地等農地整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告
――――近江八幡市　塚町遺跡――――

昭和59年３月31日

編集・発行　滋賀県教育委員会
（財）滋賀県文化財保護協会
印　　刷　明文舎印刷商事株式会社